

# 国営昭和記念公園へようこそ！！

## — Welcome to Showa Kinen Park —

国土交通省 関東地方整備局 国営昭和記念公園事務所 調査設計課長 しもで だいすけ 下出 大介

### 1. はじめに

国営昭和記念公園は、昭和天皇御在位五十年記念事業の一環として、東京都立川市および昭島市に国が設置した都市公園（国営公園）であり、昭和58年の第1期開園から今年で35年目を迎えます。

計画面積の94%にあたる169.4haの園内には、四季折々の花木や広々とした芝生空間、大規模遊具、日本庭園、プール等の施設が整備されて

います。JR立川駅からは徒歩10分、JR西立川駅は駅直結という好立地であることもあり、第1期開園以来、累計8,500万人以上の人たちに利用され、現在では毎年400万人が訪れる都会のオアシスとなっています（図-1）。

### 2. 国営昭和記念公園の設置経緯

本公園区域の整備前の姿は陸軍飛行場（戦前）、米軍立川基地（戦後）の一部でした。約466ha



図-1 国営昭和記念公園位置図

の広大な基地が街の中心に位置していたことから、「軍都立川」、「基地のまち」と表現されたと  
 言います。

その後、立川基地は、昭和52年に日本政府に  
 全面返還されますが、時を同じくして、総理府  
 (当時)が天皇陛下御在位五十年記念事業の検討  
 を始めます。昭和51年には「昭和記念公園(仮  
 称)」の建設について閣議了承、昭和54年には立  
 川基地跡地の一部に国営昭和記念公園を設置する  
 ことが閣議決定されました。

これを受け、国営昭和記念公園は、「緑の回復  
 と人間性の向上」をテーマに、豊かな緑につつま  
 れた広い公共空間と文化的内容を備えた公園を創  
 出することなどを目的として整備が進められまし  
 た(図-2)。今回はこの「緑の回復」と「人間

性の向上」を基に公園の持つ魅力(ストック効果)  
 を見ていきたいと思えます。

### 3. 緑の回復

#### (1) 既存樹木の活用

立川基地時代には、基地施設の他に住居や娯楽  
 施設等の建造物の他、植物も比較的多く生育して  
 いました。公園整備にあたっては、これらの既存  
 樹木を活用することを前提に樹木調査を実施し、  
 約1万8,000本(うち高木約7,000本)の樹木か  
 ら景観木として約1,400本を選定し、樹木の特性  
 や公園のゾーニングに合わせ、残置または移植を  
 行っています。また、景観木以外の一般木につい  
 ても、樹形が極めて悪いもの、移植しても活着困  
 難と考えられるもの以外については、基本的に残  
 置または移植を行うことで既存樹木を活かした公  
 園整備を行っています。これによって、比較的新  
 しい公園であるにもかかわらず、大径木のシンボ  
 ルツリーが多く残る魅力的な公園となっています。  
 これに加え、公園計画に必要となる樹木につ  
 いては新規植栽を行い、現在では高木だけで2万  
 本以上が生育する豊かな緑の拠点となっています。

#### (2) 公園の景観計画とゾーニング

本公園の形状は、L字であることから、東西軸  
 を「都市軸」、南北軸を「自然軸」と位置付け、  
 市街地に近い場所から、「里」、「野原」、「森」へ  
 と遷移するように計画されています。都市軸と自  
 然軸との交点には、相互空間をスムーズに景観移  
 行できるように水面を配置する計画とし、面積約  
 5haの「水鳥の池」、日本庭園の池、そこから流  
 れる溪流、トンボの湿地などを配置しています。  
 水鳥の池は、基地時代にはなかった人工の池で、  
 公園に水鳥を呼び込むことを目的の一つとしてお  
 り、一部にバードサンクチュアリが整備されてい  
 ます。

また、森のゾーンには、基地時代の建造物を撤  
 去した際に発生したコンクリート塊や近隣工事で



発生した建設残土等を盛土して、人工的につくられた「こもればの丘」があります。もともとは、ほぼ平坦だった土地に30mの丘がつくられ、市民やボランティアの手によって植樹された木々が、30年近く経った今では武蔵野の森として多くの動植物を育てています。

このように、多様な自然的環境を再生し、公園内のみならず、近隣地域の生物の拠点となるような環境をつないでいます（図-3）。



## 4. 人間性の向上

### (1) 豊かな自然的環境とのふれあい

景観計画と既存樹木の活用により、魅力的な自然的環境を形成している場所がいくつかあります。本公園にとって最も重要な場所の一つである「みんなの原っぱ」もその一つです。原っぱ中央にあるケヤキは樹齢100年と言われており、基地時代からこの場所に立ち続けています。当時の公園設計者である故 半田真理子氏は、最初にこの地を訪れた際にこの木を見て「大ケヤキを中心とした原っぱをつくろう」と即座に思ったそうです。その発想をそのままに、大ケヤキを中心とした10ha以上の広大な芝生広場が広がっていま

す。大ケヤキの幹周は、当時2.4mでしたが、今では4.2mにまで成長し、樹形もこんもりまん丸になっています。これが、本公園のシンボルツリーであり、唯一無二の景観として、その名に違わぬ賑やかな空間を生み出しています（写真-1）。



写真-1 みんなの原っぱ（秋）

また、みんなの原っぱ北側には既存樹木の活用と移植によって創出された「桜の園」があり、隣に花畑を整備することで、春には桜と菜の花の共演を楽しむことができます（写真-2）。桜が終わる頃、みんなの原っぱ西側の溪流ではチューリップが咲き誇り、この直後にこもればの丘東側に位置する「花の丘」ではポピーが咲き乱れます。



写真-2 桜の園

このように、春は花修景の開花リレーを楽しむことができ、夏にはヒマワリ、秋にはコスモスと大規模な花修景で人々を魅了します。

コスモスが終わりを迎える晩秋には、「日本庭園」をはじめとして紅葉・黄葉が楽しめます。カエデ、サクラ、ハナミズキ、ドウダンツツジのような燃えるような紅葉、トチノキ、ユリノキ、カ

ツラ、イチヨウのように金色の黄葉が園内の各所で見られます。特に、基地時代からの並木を活かした「かたらいのイチヨウ並木」や、移植によってつくられたカナル付近のイチヨウ並木は、多くの人が足を止めるほどの美しい景観となっています（写真-3）。



写真-3 かたらいのイチヨウ並木

移りゆく四季の中で、植物の魅せる表情でその景色を変化させ、楽しませてくれる空間に、人々は風情を感じるのではないのでしょうか。

## (2) 生物多様性の向上と生物とのふれあい

公園の自然的環境は、ヒト以外の生物にとっても魅力的なものとなっているようです。前述のとおり、水域、草地、樹林などの多様な自然的環境を保全・再生していますが、あわせて管理方法についても生態系に配慮することで、多様な生物の生息場所にもなっています。

5年に1度実施している生物調査の結果によれば、園内で確認される生物種は今でも増加傾向にあり、生態系ピラミッドの頂点と言われる猛禽類や中型ほ乳類も継続して確認されています。このように、公園は生物多様性の維持・向上にも寄与しています。

また、これらの生物はさらに人々の興味を引きつけます。園内で散策する際に耳を澄ましてみましょう。春にはヤマガラ、ウグイス、ヒバリ、夏にはオオルリ、キビタキ、クロツグミ、サンコウチョウ、アカショウビン、秋にはムシクイ、ヒタキ、冬にはカモなどの野鳥の鳴き声が聞こえま

す。また、水辺や地面に目をやれば、メダカやモツゴ、カエル、ヘビ、カメ、トンボ、キノコなど、さまざまな生物が観察できます。公園では、展示・観察会等の環境学習イベントを開催することで、より身近に生物の生態を学べるような工夫をしています。

多様な生物の生活環を身近に感じることができると環境は、人々に安らぎを与え、感受性を高めてくれるものだと思います（図-4、写真-4）。

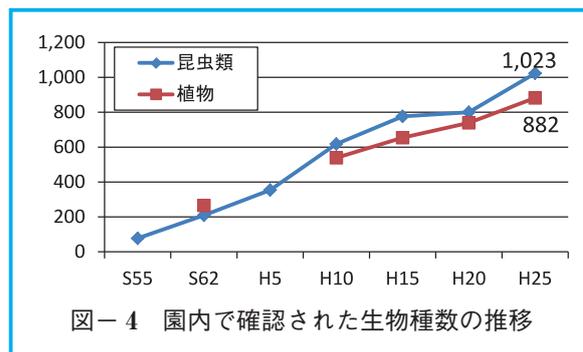


写真-4 環境学習イベント

## (3) 伝統的造園技術や地域の歴史・文化の保存・伝承

「日本庭園」は皇太子殿下御成婚記念として整備したものです。ここでは、松の「みどり摘み」、もみ上げ、雪吊りなど、伝統的な庭園管理を実施することで造園技術の保存・継承を図るとともに、関連施設である歎楓亭を活用した茶会や盆栽苑による盆栽教室等を開催し、日本文化の普及・継承に寄与しています（写真-5）。

また、昭和30年代の武蔵野の農村風景を再現した「こもれびの里」では、多摩地域で江戸中期頃に建てられた農家建物（市指定有形文化財）を移築・保存活用しています。さらに、田植えや芋



写真-5 日本庭園

掘りなどの農業体験ができる他、七夕や収穫祭など、年中行事等を通して、かつてこの地域で営まれていた自然と暮らしの知恵を現代に継承しています（写真-6）。



写真-6 こもれびの里

古き良き時代の技術や文化を後世に伝え、新たな時代の基礎として活用されることが期待されます。

#### (4) 文化的活動の拠点

本公園では、開放的な空間を利用したコンサート等の音楽イベント、写真展、絵画展、植物展等の展示イベント、マラソン、トライアスロン、サッカー大会等のスポーツイベント、各種体験イベントなど、さまざまな文化的活動を実施しており、年間で500件以上ものイベントを実施しています。

特に7月の最終土曜日に開催される「立川まつ

り国営昭和記念公園花火大会」は、例年30万人以上の人々が来園する公園で最も大きいイベントです。この花火大会は公園が開園する前から地域で行われていた行事で、公園が開園した翌年から今まで継続して公園で実施されており、地域の風物詩となっています（写真-7）。



写真-7 花火大会

また、イベントの一部では、園内ボランティアも活躍しています。園内には、園内ガイドや草花・樹木の管理、スポーツレクリエーションの指導等を行うボランティア団体が10以上組織されており、これらのボランティア（年間延べ約1万4,000人参加）の協力のもと、都市住民が生き生きと活躍できる場、多世代が交流できる場を提供しています（写真-8）。



写真-8 ボランティアによるガイド

このように、多様な人々が交流し、生きがいを持って活動できる場を提供するとともに、多くの人が文化的な活動に親しむ機会を提供しています。

(5) 健康増進への貢献

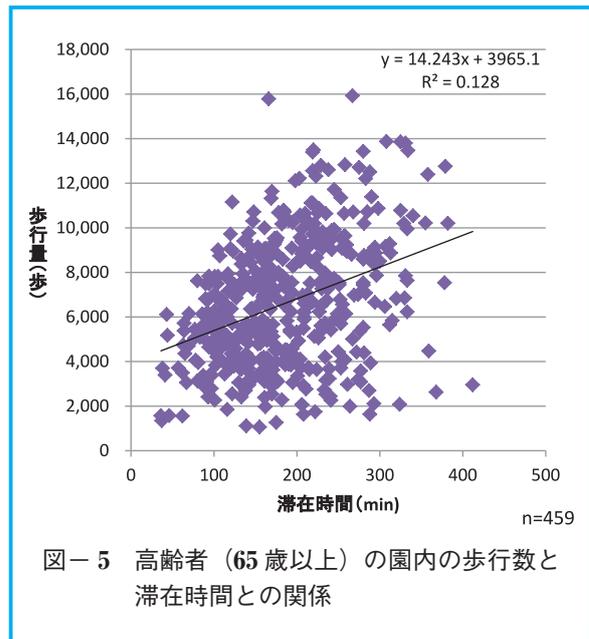
園内は、歩行者園路、サイクリングコース、管理用園路が、基本的には立体交差等により分離するよう設計・整備されています。このため、公園利用者は安全・安心して動植物を楽しみながら回遊できるような空間となっています。さらに、パークヨガ、ウォーキングやマラソン等のスポーツイベント（パークフィットネス）を開催することにより、都市住民が気軽に身体を動かすことができる機会を提供しています。これにより、園内利用者の歩行数が高まるなど、健康増進に寄与しています（写真－9）。



写真－9 パークフィットネス（親子ヨガ）

この健康増進効果について、平成28年秋に高齢者（65歳以上）を対象とした歩行量（歩数）調査を実施したところ、対象者（459名）の平均的な滞在時間（約3時間）中に、男性では約6,600歩、女性では約6,100歩の歩行量があることがわかりました（図－5）。ここから、既往の研究成果を参考に、一定の仮定条件の下で医療費の抑制効果を試算したところ、本公園で散策することにより、年間約2億円の効果があるという試算結果となりました。

また、この調査ではもう一つ興味深い結果が得られています。それは、滞在時間と歩行量との相関関係がほとんど見られなかったということです。言い換えれば、公園での滞在のあり方が多様化していることを表しています。調査時に補足的に行った簡易アンケートからは、「絵を描いてい



図－5 高齢者（65歳以上）の園内の歩行数と滞在時間との関係

た」という回答もあり、特定の場所でゆったりと過ごす方と、野鳥、昆虫、花などを目的にさまざまな場所を移動しながら楽しむ方などが混在していることがよみとれます。このように、運動が目的でなくても健康を促進することが、公園の魅力なのかもしれません。

(6) 防災・減災対策

当公園は、南関東地域における大規模災害時の政府の応急対策活動拠点である「立川広域防災基地」に隣接しています。また、立川市、昭島市両市の地域防災計画において広域避難場所に指定されるとともに、立川市の帰宅困難者一時滞在施設にも指定されています。このため、災害時の備えとして、立川広域防災基地内陸上自衛隊立川駐屯地との連絡路の設置、避難住民を受け入れるための非常用発電施設、飲料用貯水槽、災害時用トイレ、防火植栽帯等を計画・整備しています。

また、東日本大震災（平成23年3月11日）においては、最大約1,000名（約600名が翌朝まで滞在）の帰宅困難者を受け入れ、地元自治体とも協力し、飲料水、食料や毛布などを提供することで、地域の防災拠点の一つとして貢献しました（写真－10）。

災害による被害を最小限に抑え、住民の文化的



写真－10 東日本大震災での対応

生活を守るためにも、平時から地元自治体の避難訓練等の場として提供し、地域の防災力の向上に貢献しています。

## 5. 今後の取組み

近年、全国的な外国人旅行者の増加がある中で、本公園においても外国人が多く見られるようになってきました。これを受け、パンフレット、園内サイン、券売機、園内放送等を多言語化することで外国人来園者の利便性向上を図っています。

一方、文化の違いによるトラブルなども発生することから、外国人来園者の受け入れ環境の整備が十分であるとは言えない状況です。日本を代表する都市公園として、公園の魅力を外国人の来園者にも正しく認知してもらえよう対応していきたいと考えています。

また、開園から30年以上が経過していることから、施設の老朽化が顕在化してきています。あわせて、公共施設等に係る経費の削減が求められるところですが、この課題に対しても民間活力を導入するなどして、低コストで高パフォーマンスが得られる仕組みを検討していきたいと考えています。

## 6. おわりに

本公園の基本理念には「『緑の回復と人間性の向上』をテーマに豊かな緑につつまれた広い公共空間と文化的内容を備えたものとし、現在及び将来を担う国民が自然的環境の中で健全な心身を育み、英知を養う場とするものとする。」という記載があります。現在の国営昭和記念公園は、正にこの基本理念を体现していると言っても過言ではないと思います。

太政官布達第十六号（明治6年）による公園制度の始まりから考えれば、比較的新しい公園ですが、供用開始から35年がたとうとする中で、公園の有する効果が具体的に見え始めてきました。今後、社会情勢が変化すれば、より柔軟な考え方で公園を活用していくことが求められます。変わらないことで得られる効果もあれば、変化することで新たに得られる効果もあると思います。

今後もより多くの人に来園いただき、「来て良かった」、「また来たい」と思ってもらえるような素敵な体験ができる公園づくりを進め、広く発信していきたいと思っています。

まだまだ成長途中の国営昭和記念公園ですが、ぜひ遊びに来てください。



写真－11 みんなの原っぱ